

第3回新たな「いしかわの食と農業・農村ビジョン」検討委員会  
議事録

---

(開催要領)

1. 開催日時：令和8年1月23日（金）10時00分～12時00分
2. 場所：石川県庁行政庁舎1109会議室、Web
3. 出席委員（敬称略・五十音順）：

梅本 雅	株式会社ファーム・マネージメント・サポート	代表取締役
大矢場 和 恵	佃食品株式会社	品質管理部 部長
河二 利 勝	有限会社かわに	営農課 マネージャー
岡嶋 啓 介	丸果石川中央青果株式会社	取締役 管理統括本部長
新谷 和 幸	公益財団法人いしかわ農業総合支援機構	副理事長
中西 良 祥	全国農業協同組合連合会石川県本部	県本部長
橋本 豊巳夫	石川県農業協同組合中央会	専務理事
平林 将	株式会社能登牧場	専務取締役
前寺 清 一	石川県土地改良事業団体連合会	副会長兼専務理事
宮川 恒	石川県立大学	学長
門間 敏 幸	東京農業大学	名誉教授
安江 雪 菜	株式会社計画情報研究所	代表取締役 社長
吉田 一 義	有限会社吉田農園	代表取締役 社長

(Web 出席)

- |        |                          |                         |
|--------|--------------------------|-------------------------|
| 井村 辰二郎 | 株式会社金沢大地                 | 代表取締役                   |
| 秋山 博 子 | 国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構 | 農業環境研究部門 革新的循環機能開発グループ長 |
| 数馬 嘉一郎 | 数馬酒造株式会社                 | 代表取締役                   |
| 新滝 祥 子 | 株式会社ゆのくにの森               | 取締役社長室長                 |
| 瀧能 由 枝 | 石川県生活協同組合連合会             | 常任理事                    |
| 平 美由記  | ひらみゆき農園                  | 代表                      |
4. オブザーバー（敬称略）

郡 健 次	北陸農政局	次長
-------	-------	----

(議事次第)

1. 開 会
2. 挨拶
3. 議 事 ・新たな「いしかわの食と農業・農村ビジョン」素案について
4. 意見交換
5. 閉 会

(説明資料)

- ・資料1：新たな「いしかわの食と農業・農村ビジョン」素案について
  - ・資料2：欠席委員からいただいたご意見
-

## 1. 開会

## 2. 挨拶

### 【福井農林水産部次長】

皆様おはようございます。本日はご多忙の中、そしてあいにくの天候の中、お集まりいただきましてありがとうございます。定刻となりましたので、ただいまから第3回「新たな『いしかわの食と農業・農村ビジョン』検討委員会」を開催させていただきます。

それではまず開会にあたりまして、馳知事からご挨拶を申し上げます。

### 【馳知事 挨拶】

皆さんおはようございます。お集まりいただきありがとうございます。オンラインの皆さんもありがとうございます。

さて、「多様な力で稼ぎ、輝き、未来に繋げる農業・農村づくり」これを基本目標に掲げて、「1 人材の確保・育成」、「2 農業所得の向上」、「3 農村の持続的発展」、「4 能登の創造的復興」の4つの柱に基づいて、必要な施策を取り揃えております。

今年は「復興と挑戦」をキーワードに、能登の農林水産業の1日も早い復旧・復興はもとより、本県農業のさらなる振興・発展に取り組む方針であります。令和8年度当初予算にも、先取りできる施策は可能な限り盛り込んでおります。例えば、中小零細農家を中心とした集落ぐるみの営農再開支援に2億4千万円、担い手の生産性向上への支援に2億1千万円、高温などの気象災害に強い生産設備、高軒高ハウス等の導入支援に3億円、トキ認証米の生産・販売対策支援に7千4百万円、こういうふうになっております。

そこで、このビジョンについても皆様のご意見をいただいて、最終的には5月頃に開催予定の次回検討委員会に最終案をお示しすることとなっております。スケジュールを踏まえながらも、よりよいものにしていきたいと思いますので、本日もどうぞご指導よろしく願いいたします。

### 【福井農林水産部次長】

知事におかれましては次の公務がございますのでここで退席となります。

## 3. 議事

- ・新たな「いしかわの食と農業・農村ビジョン」素案について

### 【福井農林水産部次長】

委員の皆様のご紹介につきましては時間の都合により、出席者名簿、そして座席表によりかえさせていただきます。ここからは宮川委員長に議事進行をお願いしたいと思います。委員長どうぞよろしく願いいたします。

## 【宮川委員長】

今日は大変な雪でオンラインに変更された方もおりますが、骨子案から素案ということで、身がだいぶついてきたということですので、最終的な案に持つていくためのご意見をよろしくお願ひしたいと思ひます。では議事に入らせていただきたいと思ひますが、新たな「いしかわの食と農業・農村ビジョン」の素案について、事務局から説明をお願ひします。

(事務局から、会議資料1、2に基づいて説明)

## 4. 意見交換

### 【宮川委員長】

本日欠席の末廣委員からは、輸出・輸入関係の経験が豊富な方で、柱2に関して「インバウンド客に就農体験をさせてはどうか」という意見が資料に書かれています。このあとの意見交換ではそれを現場から見たらどうなのかというご意見も伺えればと思ひました。また、「女性の就農ももう少し前面に出すべきではないか」というご意見も書かれており、それも現場の立場から、ご意見・コメント等いただければと思ひました。

それではここから意見交換に移りたいと思ひます。ただいまの説明、あるいは欠席の方のあらかじめのご意見を踏まえまして、委員の皆様、全員にご発言をお願ひしたいと思ひます。今日も時間がある程度限られておりますので、1人あたり2、3分を目処にご意見いただければと思ひます。いつものように名簿順でご発言をいただきたいと思ひますが、この会場におられる方から一通り発言をしていただいて、オンラインの方に順番を回していきたくと思ひます。今日は会場におられる方では梅本委員がトップバッターになると思ひます。よろしくお願ひいたします。

### 【梅本委員】

提示された案は次世代を見据えた具体的な対策が提起されていると考へます。これまで述べてきました意見と重複するところもありますけども、今回のビジョンで新規・拡充する取組とされている青字下線のところを中心に3点申し上げたいと思ひます。

まず4つの柱、それぞれにスマート農業技術が出てきておりまして、今回のビジョン実現の核となる技術であると言へます。その中で、特にスマート農業技術を活用する人材の育成、導入推進、環境整備の推進に期待をしております。スマート農業技術は、これまでの機械化技術とは異なり、機械を持てば効率的になるわけではありませぬ。技術の利用の仕方、それ自体を工夫する必要があります。この点で、スマート農業技術の導入・活用に当たっては人材育成が欠かせませぬ。また、そこで必要なのは環境整備ですけども、それは安定して電波が届くようにするというところだけではなくて、圃場を面的に集約することや、栽培方法の改善なども含め、スマート農業促進法でいう「生産方式革新事業活動」これを同時に進めていくこと、そしてそのための体制を整備することが特に重要であると思へます。

第2は、これもスマート農業に関連いたしますけれども、中山間地域に対応したスマート農業技術の実証・普及についてです。私は中山間地域に対してもスマート農業技術の導入は有効であると思へます。しかし、例えば中山間地域に合わせて小型のロボット農機を開発するといったことは必ずしも有効な方策とは思へませぬ。中山間地域は小規模経営が多く、圃場も小さ

い場合があるということは事実ですが、農業者を組織化する、あるいは地域でまとまって農業支援サービスを利用するといったやり方で、機械の稼働率は十分に確保できます。また、岩手県で取り組まれているように、小区画の傾斜地でも緩やかな傾斜をかけながら圃場を合筆していけば、それは畑作物の生産に適した大区画圃場になります。中山間地域の状況をそのまま前提にするのではなく、そこでの生産体制も変えながら、同時にスマート農業技術の利用方法をそこに適合させていくことで、大きな効果を生み出すことが可能になると思います。

最後に、円滑な継承について指摘をいたします。今回、柱の1には「離農予定の畜産農家の資産データベース化等によるマッチング促進」が記載されました。後継者を確保できず離農していく大規模経営も多い中で、中でも畜産経営は投資額も大きいことから、資産を新規就農者等へと受け渡す取組は、今後非常に重要になると思います。その場合、私はそこでの資産は畜舎や家畜といった有形資産に限るのではなく、無形資産も含めた農場全体を資産と捉えていてはどうかと考えます。そして、そのような意味での資産データベースを作成するときに必要なとなるのは、その価値すなわち企業価値の評価の方法です。渡す側・譲り受ける側の双方が納得できるような資産を評価する取組は、マッチングを進める上で不可欠になります。このような仕組みができれば、離農される方が老朽化して価値も低くなった施設をデータベースに載せるのではなくて、後継者不在が確定してきたときに、事業資産の価値が十分にある段階で、事業の移譲に向けた検討を進め、データベースに乗せていくようになれば、移譲者・継承者双方にメリットとなり、それにより産地あるいは地域農業の継承対策として、非常に有効な手段になると考えます。

### 【宮川委員長】

ありがとうございました。かなり具体的なコメントをいただき、本当はこれに対していろいろと意見交換ができればいいのですが、時間の都合でご発言は記録していただいて、事務局に預かってもらい、改善に持っていくということにしたいと思います。一通りご意見をいただいて時間があれば戻ってきて再チェックということで、意見交換にしたいと思います。続きまして大矢場委員お願いいたします。

### 【大矢場委員】

柱2について話したいと思います。

私は食品会社で商品開発をしておりますが、前にも少しお話したんですけれども、以前加賀野菜を使った商品開発をして販売をしていたんですけれども、開発当時は取材などもあって、話題にはなったのですが、販売を進めていく中で、意外と県外の方に加賀野菜が知られておらず、販売を継続することが難しかったです。石川県産の農畜産物の特徴や価値をお客様やバイヤーの方に表現するのはとても難しく、例えば、加賀野菜の金時草であれば、葉の裏側が鮮やかな紫色でポリフェノールの一種であるアントシアニンを含み、生活習慣病を改善する抗酸化作用が期待できるなどと言われているんですけれども、では「熊本県の水前寺菜とはどう違うのか」や、「それを加工食品にすると同じような効果があるのか」と聞かれると答えに困ってしまうことがあります。石川県の農産物の機能性、栄養面については、石川県立大学や石川県農業試験場や工業試験場でも分析されているんですけれども、それを販売や営業活動で使おうとすると、とても難しくなっています。特に食品に関しては、食品表示の基準がとても厳しくて、その食品自体に栄養面の効能の表示が簡単にできないので、お客様に伝えることが難しく

なっています。石川県の農産物の特徴や付加価値を、その農産物や加工食品を売るためにどう生かせるか、マーケティングにどう繋げられるのかを今後も検討していかないといけないのかなと思います。

### 【宮川委員長】

ありがとうございました。続きまして岡嶋委員お願いいたします。

### 【岡嶋委員】

10 ページの KPI を全体的に見て感じたことを申し上げます。

前回の 2016 年の農業・農村ビジョンでも、同じような感じで色々な施策を提案されておりまして、それに対する達成率はどうだったかということも第 1 回のときの資料でも拝見しました。そのときは、健闘されて百何十%と達成されている施策もあれば、達成できなかったものもあり、色々ありました。今回拝見して、私に思いもつかないところから KPI を設定されてすごいなと思う反面、こんなことを言う「意地悪なことを言う」と思われるかもしれませんが、「これを達成したら、石川の農業はすごく右肩上がりに転じるのだろうか」というと少し疑問を感じます。というのは、そもそも前回にしても 2016 年からやってこられて、それなりの成果を作られてきたわけですが、石川の農業従事者というのは、どんどん減少の歯止めがかからない。例えば今回の資料でも耕稼塾を中心に 1 年間に大体 120 人の新規就農者が増えています、これを 150 人にするという目標は達成できるかもしれませんが、一方で、5 年間で大体 2,000 人ほど石川県の農業従事者は減っています。つまり 1 年間に平均すれば 4、500 人がどんどん減っているというのが現状です。ということは「新規就農者の数が 150 人だから達成して良かった」と言っても、300 人ほどは減っているわけで、それを持って石川の農業というものが衰退に歯止めがかかるかということ、これは NO ですよね。

あるいは成長戦略で設定された主要目標は、農業産出額が現在 520 億円であり、これが令和 14 年度の目標値として 600 億円。私はこれは、現在の数量減少と単価高や物価高という流れの中では達成できるかもしれないと思います。現実には中央卸売市場では、数量は大激減ですけども取扱高は横ばいもしくは微増傾向にあります。ということは、これからのコストプッシュ型のインフレが続くのであれば、金額だけ見ればそれは可能かもしれませんが、ただ、例えばこの間発表された農業センサスによると、石川県は 20 年前より農業従事者が 46%減少しているという形になりました。これ全国ワーストです。これを踏まえて、農業従事者数の減少に歯止めをかけることは難しくても、例えば農業従事者の減少幅を小さくする、1 年に 500 人減少しているけど 8 年後には 300 人、200 人に留めるといった目標が必要だと思います。この一つ一つの計画が悪いとは言いませんけれども、何か見逃しているような気がして、私はこれでいいのかなと思ってしまいます。

トキの認証米の認証面積の KPI は良いと思います。トキとブランド米を結びつける発想とかは大変素晴らしく、ブランド農産物王国石川ならではだと、すごく感心しています。また、環境に配慮したやり方であるとか、有機農業に対するやり方に関してもいろいろ書いてあり、良いことだと思います。ただ、それならそれで数値目標を立てたらどうかと考えます。今、全国的に見れば有機農業は 0.何%ですよね。一方で、井村さんみたいな有機農業で実績を上げていらっしゃる方もいるということで、石川県にはそういうノウハウとか優秀な方がいっぱいいらっしゃると思うので、それを機に他県よりもドーンと高く、石川県の強みみたいなものを作る

とか、すごく意欲的なことが何かもっとできるのではないかなと思った次第です。

### 【宮川委員長】

ありがとうございました。数値目標を作るとそればかり注目してしまうけど、本当に目指すところも忘れないでいただきたいというご指摘だったかと思いますが、また追って時間があれば議論したいと思います。

続きまして河二委員お願いいたします。

### 【河二委員】

僕から3点意見したいと思っております。僕はこの中でも最年少であるのは間違いないのかなと思っておりますが、若手の視点から発言をさせていただきます。

まず柱1の人材の定着と地域リーダー育成について意見をさせていただきます。僕は現在、石川県の農業青年グループの会長を務めているんですが、年々人が減っています。珠洲の方においても珠洲地区グループがなくなるといったところで、僕が入って8年ぐらいですが、若手間の横の繋がりが減っているのが目に見えるところです。先輩農家と僕の立場は先生と生徒みたいな形なんですけど、横の繋がりがすごく薄いなと思っております。今ここにいる先輩経営者の方々も農業青年グループは通ってきている道だと思っております。人数も減ってきている中で、農業青年グループの活動に対しての活動費の助成であったり、負担軽減策というところを講じていただければ、若手農業者の活発化に繋がっていくと思っております。ここが投資対効果の高い定着支援であったり、リーダー育成にも繋がると考えております。

もう一つがスポットワークの観点についてです。スポットワーク、タイミーやデイワークはとてもいいと思うのですが、繁忙期の異なる産地や品目間での作業を補完し合う「産地間労働力リレー」というのを、ぜひ考えていただきたいなと思っております。僕個人で言いますとスイカを作っているんですが、レンコン農家とスイカ農家はとても相性が良く、うちもレンコン農家の方からバイトを派遣してもらおうということもやっておりますので、こういった産地間労働力リレーは他の作物もできるのではないかと考えています。これがうまくいけば、プロの方々に入らせていただくということで、機械の運転であったりそういうところもスムーズに進んでいくのかなと思っております。

最後ですが、柱2の農地整備についてです。農地整備や集積を進めていただくのはありがたいのですが、広い観点からの目線で、集積した後もスマート農業がフル稼働できるスペックというのも一つ、たぶん視野に入っていると思うのですが、そこも拡充していただきたいなと思っております。僕も現時点での課題は、農地は年々増えているのですが、農地間の移動、移動距離のコストや効率の面でも課題に残るところはあるので、農地を1か所にまとめる団地化というところと一緒にスマート農業がフル稼働できるスペックというのも県として用意していただくと、僕ら若手農家も将来的にすごく拡大もしやすくなるのかなと思っております。

### 【宮川委員長】

ありがとうございました。続きまして新谷委員お願いします。

## 【新谷委員】

2点意見を申し上げます。1点目は能登の復興についてです。農業は国の政策に大きな影響を受ける分野であると思いますが、本県固有の大きな課題として、能登の震災、水害からの復旧・復興が挙げられると思います。地震の発生から2年が経過いたしました。復旧・復興に向けての取組というのは、この新しいビジョンの前半おおむね3、4年の期間が正念場になると思います。今回の素案で、柱4として「能登の創造的復興」を掲げ、「施策の総動員」と決意表明ともとれるタイトルがあり心強く感じますので、現場のニーズを汲み上げた手厚い支援・取組を期待しております。

それから2点目ですが水稲、米についてです。10ページの主要目標に農業産出額が掲げられ、令和5年の現状521億円とありますが、このうち約2分の1を米が占めております。ご承知の通り、令和6年以降、お米の高騰が起きまして、現在も相当な価格となっております。多くの米の生産者はどれぐらいの価格で落ち着くのか、今後の経営計画を左右する要素として、大きな関心を寄せ大変心配をしております。今回の素案の中で、米の記述がいくつかは出てきておりますが、価格に関するものとしては、3ページの④にある「販売事業者・消費者への理解醸成」のみであります。向こう7年間の米の生産量・価格を数値的に見通すということは、現時点では困難かと認識はしておりますし、本県だけの対策でコントロールできるものではないと思いますが、県としても関心を持っているというメッセージ、例えば「米の生産規模については、全国的な需要や価格の状況を注視し、国と連携して適切に対応する」といった米農家向けのコメントがどこかにあってもいいのかなと感じました。

## 【宮川委員長】

ありがとうございます。米の生産の方針に関しては今、国の方でも転換があるようなので、なかなか見通しが立たないところもあるのかもしれませんが、価格を重視するのか生産量を重視するのかは、悩むところなのかなと個人的には感じています。

では中西委員お願いいたします。

## 【中西委員】

全体としては前回の皆さんのご意見も入れていただいた内容になっていまして、非常にいい内容だと思います。ただ、それをするために具体的にどういうことをするのかというところが、これから検討されるのだと思いますが、まずそこら辺がもう少し見えてこないという感想です。例えば、能登牛の出荷頭数2,000頭とありますが、元々1,500頭という目標もあって、残り500頭は全部輸出で増やすつもりなのかどうなのか、ワーキンググループで検討いただいたんだと思いますが、増やすということは、岡嶋委員からもありましたけど、単価はたぶん下がっていくので、その辺の頃合いもあります。あと先ほど委員からもありましたが、金額もそうですけど、生産面積であったり生産数量であったり、そういったものも当然KPIとして紐づけしていただかないと、実際現場でやる農業者もどういうふうに頑張っていけばいいのかとか、そういったところが目に見えてこないのかなというのが全体としての感想ということで、意見とさせていただきます。

## 【宮川委員長】

ありがとうございました。続きまして橋本委員お願いいたします。

## 【橋本委員】

今回取りまとめいただいた素案を眺めさせていただいて、構成もわかりやすく、課題の設定と施策の方向性についてずっと理解できました。その上で2点ばかりご意見をお話したいと思います。

1点目は、先ほど出た農林業センサスのデータです。我々も分析してみたんですけど、農業経営体が5年間で30%減少、農業従事者が5年間で35%減少ということで、足元で担い手の問題が非常に加速しているというのがわかりました。一方で、30ヘクタール以上の規模の経営体の集積が極めて進んできているということでございますので、将来に向けた課題と希望が感じられます。経営体の大きなところは、インフラがありますので、より成長の可能性も考えられます。その上で、センサスは農業経営体や基幹的農業従事者、雇用労働力などそれぞれ単体の数字が載っているものですから、本県の農業人材の実態というのが、個別の数字だけを持っていてもなかなか立体的に見えません。ですので、もう少し立体的に農業人材、労働力がどういう形になっているのか見えるようにしておいた方が、将来の施策に有効ではないかと思っております。これが一つ我々も課題に感じたところでございます。

もう一点は農村の持続的発展の関係で、私は非常に大事だと思っています。農業のインフラ、水路とか農道とか鳥獣害対策とか、こういったところは地域、集落が担っていることが多いと思っております。ただ中山間は特にそうなんですけど、集落機能はもろに人口の減少と高齢化の影響を受けている分野でございまして、ここは対策というのはなかなか難しいと思っておりますけども、ぜひともこちらの方にも目を向けていただいて、施策を講じていただきたいと思っております。

## 【宮川委員長】

ありがとうございました。では平林委員お願いします。

## 【平林委員】

私の方からは柱1や柱2、農業人材の定着や農業所得の向上についてご意見させていただきます。

第2回から第3回検討委員会の中に畜産関係のワーキンググループがありました。各地域の皆さんがまず口を揃えて言ったのが人材不足です。担い手の減少、後継者がいない、労働力を確保できない、各地域それぞれ問題が違ったりはするんですけど、特に奥能登地域のことに関して言いますと、規模を拡大する生産者がいたとしても、まず労働力を確保できません。労働力を確保できない理由はどういうことかということ、住まいの問題なんです。住居がなく、インフラも地震によって壊滅的な状況になってしまいました。そのうえ住むところもありません。外国人技能実習生とか県外・県内から能登地域の方に働き手のマッチングをすることも、そこでまず問題になるのが住まいの問題です。では自前で建物を建築しようとしても、現在は奥能登地域の方では場所によってなんですけれども、坪単価200万円と、建物を建てるにしても



かなり現実的ではない金額が出てきている、そういった実情があります。これから公営住宅とかができてくるという話で、そこを活用すればいいじゃないかという意見もあるんですが、公営住宅はそもそも誰のために今作っているのかということ考えたときに、被災された方がそこに住むために作られているものだと思います。その被災された方が公営住宅から出るときは何年後なのか。そこまで住まいが空くのを待たなきゃいけないのかというような問題です。確かにスマート農業を推進するのはいいと思います。省力化になるし、働く人が楽になるというのはわかります。でもそもそも働く人間がいません。働く人間を確保できません。働こうとしても、そこへ住むことができません。農業の問題とは関係ないのかもしれないんですけど、そういった住まいの問題が今現実的に能登地域では、まず根本としてあるということをご理解した上で、規模拡大の話とかスマート農業の話をしていただければなと切に思います。

それに加えて今回柱1のところではタイミー、デイワーク等のサービスの活用ということが、柱の中に載ってきてしまっていることについて、畜産農家からの意見として、これは問題があると提言させていただきます。なぜかというと、畜産では外部の人間をみだりに入るのを拒否しないとイケません。家畜伝染病予防法に基づいて立ち入りを制限し、立ち入りする際にも様々な条件があります。そういった中でタイミーやデイワーク等でみだりに外部から人材を確保するというのはかなり難しいです。これが当たり前のようにタイミーやデイワーク等を活用しましょうと言われても、できるところとできないところがあるということをご理解いただければと思います。

最後に農業所得の向上について、大矢場委員も言っていました通り、機能面での数値としての栄養価ということも必要だと思います。そのうえで、販売方法に関して一つご提言させていただきます。以前も申し上げたかもしれないんですけど、例えば肉、野菜を「料理」として販売していく。消費者の方が想像しやすい形で販売することで、我々の生産物が目に触れていけばいいなと思います。近々、畜産課でやる取組として、肉だけではなく肉の近所になる食材、例えば塩とか野菜とかを一緒に見てもらって料理人に評価してもらって、売り出そうという取組もしております。そういった取組が県全体として、肉だけではなく野菜も塩も様々なものが一体となって売れるような仕組みが作れば良いと思っております。

## 【宮川委員長】

ありがとうございました。では前寺委員お願いします。

## 【前寺委員】

何回かこの検討委員会に出席させていただきまして、私どもは土地改良施設といいますが、基盤をいかに整備していくかという観点で、これまでお話をさせていただきました。前回、農業を行う上では農地を区画拡大する整備というものも大切だということで、関連する項目に示されており、大変わかりやすくなってきていると思っています。

ただ一点、前回もお話させていただきましたが、農業、営農を行う上では農業用水がしっかりと供給されないと、当然、そこで作物ができないということです。これまでは、整備・改修という観点で進められてきましたが、整備された施設に対しての保全ということをいかに今後行っていくかが重要となっています。先ほど橋本委員が言われたように、農村の維持・発展という中で既存の水路をいかに管理していくか。取水口や用水路の管理、また、排水路やその下

流にあるポンプ場の管理が非常に重要な要素になってくると思います。農業用ため池の管理も同様です。農村の維持・発展の中で、既存施設をいかに保全していくかという項目をぜひ入れていただければしっかりとした維持ができるのではないかとということをご検討していただきたい。また、県内にある土地改良区は、基幹的な水路等の施設を維持・管理しています。土地改良区では農家から賦課金をもらいながら維持・管理を行っていますが、賦課金も値上げできない状態で、組織運営が苦しい中何とか管理を行っているので、そういう点も理解されて肉付けをしていただければどうかという思いがあります。

それと資料1 ページに違和感がありまして、柱4「能登の創造的復興」のところについて、他の柱については①②③という項目で入っていますが、なぜかここは内容の項目の表現だけになっており、なぜこのような表し方になっているのかということに疑問があります。柱4の内容を見てみますと、○や・(ぼつ) がありますので、どのような観点でこういうふうな形になっているのか教えていただければと思います。

### 【宮川委員長】

ありがとうございました。それについては何かコメントできますか。

### 【牧野農業経営戦略課長】

柱4については、(1) はモデルケースといいますか、プロジェクト的なものに取り組んでいくというもので、○で分類するという形が適切ではないかと思っておりました。(2) についても、総動員ということで、柱1~3 と同じようなものがずらっと並んでくる形にならざるをえないかなと思います。今のところこのような形になっているんですけども、ご意見も踏まえて、冊子に至るまでの過程で何らかの整理・検討をしていきたいと考えております。

### 【宮川委員長】

ありがとうございます。では、門間委員お願いします。

### 【門間委員】

私の方から柱1 と柱4 について若干コメントさせていただきます。柱1 の人材の確保・育成について、経営継承は非常に重要だと思います。特に早期の経営継承、すなわち、なるべく早く若い人たちに経営を継承していく取組をやる必要があると思います。ただ、親世代が早期に息子たちに経営権を譲るということになると、親世代はどうするのかということが問題になります。親世代が再び活躍するシステムを導入することも重要です。親世代には技術も経営も優れている人もおりますので、農業技術や経営のコンサルタントみたいな形でもう1 回石川県の農業のために一肌脱いでもらうような取組が必要です。この方々が若い経営者の相談相手になって若手経営者を支える仕組み作りをする必要があると思います。

それから2 点目は将来の担い手としての「地域おこし協力隊」の重要性です。私は岩手の盛岡にいますけれども、岩手県はかなり「地域おこし協力隊」が農業あるいは農業関連ビジネスを支えています。北陸3 県は「地域おこし協力隊」の人数がものすごく少ないので、ぜひ市町と連携して、「地域おこし協力隊」の人たちをもっと農業の分野に呼び込むというような取組

を県としてやった方がいいと思います。地域おこし協力隊の地域定着率は5~6割で半分はそのまま地域に残ってくれるので、ぜひ取組を強化してください。

それから集落営農の継承を強く打ち出されていますが、もう単純な継承では集落営農はもたないと考えています。まず第1に小さな集落単体でやるというのは成り立たないので、複数あるいは広域の集落で様々な活動組織を支援する仕組み作りというのが必要になると思います。集落運営のための事務処理の支援、草刈り、地域づくり活動等といった多様な地域の業務を、もっと市町の業務と連携して新ビジネスとして創造することが重要です。要するに、集落を支える人材が新しいビジネスを創造できるような支援をやってもいいのかなと考えました。

それからもう一つ外国人の労働力についてです。現在は、単純作業を行う技能実習生だけでなく、在留期間の制限がなくなった熟練した技能を持った特定技能2号という形で、日本で定住が可能に、また家族も呼び寄せることが可能になりました。優れた人材には定住して日本の重要な労働力になってもらうという制度です。農業も特定技能2号に認められています。もっと専門的な技能を持った優秀な外国人材の受け入れを県として考えた方が良いと思います。先ほど別の委員からのご指摘がありました、住む家の確保は問題だと思いますが、将来的に考えていくと優秀な外国人材をどう活用していくかということが重要になってきます。

それから柱4ですけど、「能登モデル」というキーワードは狭いような感じがします。この柱では、復旧・復興で作り上げる能登地域の未来を描くような、キーワードが必要だと思います。例えば、市民と一緒に作り上げていく農業、それは交流であったり観光がキーワードとなります。また、能登農業全体のネットワークとして考えると、様々な人たちが能登を思い切り楽しめるような農業のネットワーク化が必要だと思います。あるいは次世代の人々が活躍できる、高齢者から若者まで様々な人たちが活躍できる農業モデルを創造するのが能登だと思います。あるいは産学官連携を能登で推進することができないか。そうした地域農業の新しいプラットフォームを能登でみんなで作っていこうというような取組の必要性を感じました。長期ビジョンですから、もっと大胆に将来を考えてもいいのではないのでしょうか。

## 【宮川委員長】

ありがとうございます。安江委員お願いします。

## 【安江委員】

まずはこのビジョンがシンプルな内容で、4つの柱で、非常に言葉もわかりやすく、頭に入ってくるなと感じております。私の方からは主に二つの視点で意見を述べたいと思います。

まず1点目は、柱3と4に共通する部分ですけど、全体としては石川県の農業を強く牽引していく農業法人をより強化していこうという流れと、もう一方は、やはりそうは言っても集落や中山間地を支えていく農村コミュニティをどうやって維持していくかという2方向に大きく分かれるのかなと思っています。私は里山里海と人がどのように共存し、そこでどんな文化があるか体現していくような集落をぜひ支えていきたいと思っている立場です。そういう視点でいくと、これまで兼業農家さんが事業数とか生産量を支えていたところもあったとは思いますが、そこが軒並み高齢化でやめてしまいます、田んぼをやめますということになっていると思います。そういう個々の農家を支援するというよりは、今後、集落・地域を経営体としてどのように構造改革していくかという視点になってくるのではと思っています。少ない人でどうや

って稼いでいくかを考えると、必ずしも農業分野だけではなくてツーリズムとか色々な手段をきちんとポートフォリオを組んで、農村コミュニティを維持しつつ、どうやってその集落の経営体を担うかということが非常に重要になってくると思っています。

能登のある地域、人口は4千人ぐらいですけど、田畑も山も海もある地域の中で、私は「特定地域づくり事業協同組合」の設立を支援するとか、地域の経営体のマネジメントをする会社を設立するという支援をしています。これは何を狙っているかということ、地域で週2日ぐらいなら働けるかなとか、泊食分離すれば、飲食の方はカバーできるけど宿はここ使っているよとか、持てるリソースをどうやって最大限に発揮できるかということとをみんなで考え取り組む事業体の予定で。地域毎にその背景や特徴があるとは思いますが、そこを県庁の皆さんや国の方が、この地域はどのような事業手法の組み合わせでいくといいのかという部分で総合的に支援していくことも大事じゃないかと思っています。

2つ目の視点として、これをどうやって進めるのかという推進体制の話になります。ここに書いてあるのは農業ビジョンですので割と農政に近いことがメインですが、集落・中山間地をどうやって持続可能にするかという視点でいきますと、国の方でも二地域居住の推進とか色々な政策がありまして、それに紐づく色々な補助金があったりします。RMOだけじゃなくて総務省とか国交省、観光庁と色々なものがあって、地域側からするとどれを組み合わせるかという話になりますけど、おそらく結構縦割りになっていて「これはあるんですけど、これは当てはまりませんよね、残念ですね」みたいな話が結構多いです。ドクターが集まって患者さんの手術とかをどうやるかというカンファレンスみたいな形で、特定の地域・エリアに対してもう少し横串を刺すようなセクションの人たちが集まって「どうここを持続可能にしていくか」を話すような、何か定期的な横の情報共有とかそういったものが県庁の中や市町自治体としていく、さらにそれを民間や地域側の力、ポテンシャルを引き出していく方法で導いていくような推進体制で、プロジェクトタイプで進められたらいいなと感じました。

### 【宮川委員長】

ありがとうございました。では吉田委員お願いします。

### 【吉田委員】

今回のビジョンに関わる流れの中で、限られた会議日数の中で、私は結構まとめてよくできているなと感じております。その中で人材確保・育成の「多様な人材確保」について、色々な考え方があるかと思いますが、意見を述べます。私は農業経営者として万能に全てをわかっているわけではないので、やっぱり弱点というか至らぬ分野もあります。そこで兼業・副業人材として、農業と全く違う、例えばIT等に強い人材をスポット的に雇用する仕方は沢山あってもいいのかなと思います。アルバイトで1日うちに来て働くというのではなくて、うちの経営体にとって足りない部分を補ってもらう人材を確保するのもこれから大事になってくると感じております。今言ったことは農業に関わらず他の産業でも多分、兼業とか副業人材確保ということで施策が講じられているかと思いますが、ぜひとも農業経営の方でもそのような施策が目に見えて活用できるような形にさせていただけたらいいと思います。

あと、柱3の農村コミュニティの維持・強化について、先ほど河二委員も言ったように、農業者の団体というのは県内にもいくつもありまして、若手の組織もあれば我々の振興協議会と

いう中堅・高齢の会員の組織もあって、どの方々もやはり農業にとって大切な人材だと思います。昨今、経営体が大きくなるにつれ農業者数が減っていつているので、会員数も減ってきて、会そのものの弱体というか、会員数が少ないために活動がかなり狭められているような中でやっているのですが、とはいえ、今やられている方がリタイアしないでいられるような農業環境作りというのは重要じゃないかなと私自身は考えております。駄目だから切っていくというのではなく、経営そのものにとっても大事かもしれないけど、地域ということを考えてときに、地域の人材として大事な人たちもいるわけで、そういう人たちにも目を向けていただけるような施策があってもいいのかなと私自身は考えております。

### 【宮川委員長】

ありがとうございました。この会場にご出席の委員の方々からのご意見が終わりましたので、オンラインで参加いただいている委員のご意見を伺いたいと思います。

まず秋山委員をお願いします。

### 【秋山委員】

私の方からは、環境の観点からの意見とさせていただきます。温室効果ガスを削減する栽培技術の推進に加えて、カーボンクレジットや環境直接支払いの活用推進についても追記いただきましてありがとうございます。J-クレジットの中でも、中干し延長は全国でも面積が増えておりますので、石川県においてもぜひご活用いただければと思います。また、統一ラベルの取組も非常によいかと思われました。先ほどから色々なご意見を伺った中で、復興に加えて労働力等多くの課題があると理解しましたけれども、環境の方はどうしても後回しになってしまうところかもしれませんけれども、クレジットなどはメリットもあると思いますので、うまく活用いただければと思います。

### 【宮川委員長】

ありがとうございました。今日リモート参加となりました井村委員をお願いします。

### 【井村委員】

まとめていただきありがとうございます。私からは柱4と河北潟干拓地について少し述べたいと思います。

柱4の8、9ページ目にまとめていただいている能登のところについて、まずは「復旧」と書かれてあって、その後「復興」という言葉の使い分けになっていると思います。先般、私達石川県農業法人協会の会員と意見交換をしましたが、まだ「復興」はほど遠く、「復旧」のフェーズにおりまして、この「復旧」と「復興」をしっかりと使い分けて整理いただけるとすごく嬉しいと思っています。そんな中でも、この9ページに書かれている文章、例えば「育成」「確保」「促進」、あと「強靱化」という言葉が使われたりしていますが、やはり「復旧」というのは地震前の状態にとにかく戻りたいということです。例を挙げますと、農道の修復もまだほとんど進んでないところがありますし、私達の圃場でもまだパイプラインが使えない状態です。まだまだ復旧というところまで至ってないわけです。令和14年度までのビジョンをつくるときに、いつまでにどの程度の復旧が行われて、さらに前向きにどのような創造的復興が

行われるのか、能登の農業者がこの9ページを見たときに「こういうことなんだな」とわかるように、「復旧」のフェーズと「復興」のフェーズ、さらに「創造的」というところがどの辺まで夢が持てるのか分かるような書き方に整理いただけるとすごく嬉しいと思います。

また、先ほど岡嶋委員から「担い手が減る中で、『いしかわ耕稼塾』で何人増えたということも大事だけど、これから減っていく部分をどう考えるか」というコメントがあったと思います。例えば「石川県の担い手が今後どうなっていくのか、どうしていくべきか」を語るKPIを作るときに、まず現在のエビデンス、現在農政が発表しているデータとして「このままの状態だと14年にはこうなる。これに対して石川県はどういうアクションをして増やすのか。県外から呼び込むのか」というように、まず現状をしっかりと書いた上で、KPIがあるとすごくわかりやすいのかなと思いました。

KPIの柱4の能登のところは、多分柱1~3と関連することが多いと思うんですけど、柱4の項目で柱1~3の能登の場合はこうだというKPIがあるとすごくわかりやすいと思います。例えば柱2の圃場の整備でKPIを掲げていますが、では能登地域では圃場の整備でどれぐらいの目標を持っているのかということを書いてもらうと、農家にとってみればすごくイメージとか希望が持てるのかなと思います。

総論的な話ですけど、能登を全国の復興モデルとして横展開したいという野心的なことも書かれている中で、少し足りないと思うのが「担い手と農地」の視点です。あと先ほど他の委員からもご指摘がありましたけれども「地域政策と産業政策」の視点です。この辺を整理して能登であるからこそ地域政策としてどんなことをやっていくのか、農業という産業の政策としてどういうことを行っていくのか、ここも分けて整理いただけると専業農家、大きい農家はその立場で先が見えますし、兼業農家や集落営農もイメージできるのかなと思います。

それともう一つ、皆さんご存知のように「地域計画」を地域毎でたてることになっております。能登の地域は震災もありましたので、市町のマンパワーとかも不足していることもあって、本格的な議論は全国から少し遅れてこれからどんどん行われていくと認識していますが、能登の「地域計画」をどのように伴走支援していくのか考えることが必要です。これは県がすごくリーダーシップを取らないといけない部分かと思っていますので、ぜひ県に「地域計画」の策定に深く入っていただいて、素晴らしい「地域計画」が能登の各地でできるように目指していただくと、必然的に色々なものが出ていくのかなと思いますので、ぜひ「地域計画」に対する考え方を特に能登のところに書き込んでいただければと思います。

それと小さい話なんですけど、柱3(2)のKPIに「イノシシ農作物被害額」がありますが、今能登では鹿がかなり見られるようになりました。私が2006年に能登に参入したときにはイノシシはゼロでした。それがあつという間に増えて今すごい被害になっていまして、電気柵でみんな対応しているんですけども、鹿が来ますと、電気柵では駄目で恒久柵が必要になります。ぜひ未然に防げるようにしていただきたいです。被害があつてから対策を打つては遅いので、福井県や南の方の鹿の被害を受けているようなところもしっかり調査をして、良い準備をしていただいて、イノシシだけではなく鹿対策、特に能登の鹿対策ということをぜひ頭の隅に置いて、書き込んでいただければと思います。

最後に河北潟干拓地について、皆さんご存知のように、河北潟干拓地は大規模な農家が入っております。約千百ヘクタールの畑地と酪農経営をされている農家があります。石川県の農業生産基地とも呼べるここに対する言及がこのビジョンにはありませんので、河北潟を、畑地農業を、酪農団地の形をどうやっていくのか。ぜひ河北潟についても、少しでも構いませんの

で、県としてどのようなビジョンを作っていくのかということを書き加えていただきたいと思います。

### 【宮川委員長】

ありがとうございました。では数馬委員、お願いいたします。

### 【数馬委員】

ビジョンをまとめていただきありがとうございます。私からは酒蔵そして能登の事業者として3点お伝えできればと思います。

前回とも重複するかもしれませんが、まず柱1の人材確保・育成について、ぜひ農業従事者が増えていただきたいと思いますので積極的に進めていただきながら、良い事例やマッチングがあればどんどん情報発信をして、農業に人が集まるような流れを生み出していただけばなと思います。そして平林委員もおっしゃっていましたが、地域外の人材を活用する、人を呼び込むときには居住地の問題もセットになってきます。現在能登ではそこが大きな課題となっておりますので、そこもご考慮いただきながら、できればその居住問題を解決しながら、こちらを進めていただきたいと思います。

続きまして柱2の農業所得の向上についてです。米の超低コスト技術の確立・普及について、昨今の米の価格高騰に伴って、我々酒蔵の中では仕込み数量を結構落としているという事例もよく耳にします。お米の価格は日本酒の価格にダイレクトに反映されますので、この新技術によって、酒蔵としては新しいお米の栽培技術を地酒の競争力の向上に繋げて安定した、また増加する原材料の調達に繋げていければなと思っています。

最後に3点目の柱4の能登の創造的復興に関しまして、外部からの企業参入促進とありますが、こちらでも能登にお金が落ちるような、また残るような仕組みで誘致いただければと思っています。

### 【宮川委員長】

ありがとうございました。続きまして新滝委員お願いします。

### 【新滝委員】

私の方からは観光の立場から、「柱2 農業所得の向上」についてお話しします。まず、小松空港のインバウンドの現状です。台湾便は週8便あり、外国人観光客の中でも台湾の方が一番多くなっています。次いで、香港、韓国、上海と続きます。こうした観光客に向けて、農産物をPRして輸出を伸ばそう、という考え方はよく聞きますが、実は国によって事情がかなり違います。例えば台湾の方は「日本のフルーツをぜひ持って帰りたい」と言われることが多いのですが、実際には持ち込み規制が厳しく、空港で罰金になるケースもあります。需要はあっても、簡単にはいかないのが現実です。

石川県は、これまでも輸出に関して様々な取組をしてきました。私自身、台中にいた頃、裕毛屋（ゆうもうや）スーパーで石川物産展を見て驚いた記憶があります。今でもシンガポールなどで物産のPRや販売を続けていますよね。それなのに、なぜもう一歩大きく伸びないの

か。新しいことを次々始めるよりも、これまでの取組を振り返って、「どこがうまくいかなかったのか」を整理することが大切なのではないかと思います。

観光業界の話題としては、最近全国的に抹茶や日本酒が足りない、という話をよく聞きます。特に抹茶は本当に人気で、ヨーロッパから来たお客さまが「抹茶のアイスはありますか?」と聞いてくるほどです。このブームがいつまで続くかはわかりませんが、うまく対応できれば、収益性の高い商品になる可能性は十分あります。

インバウンド全体の流れを見ると、いわゆる「ゴールデンルート」、東京から名古屋、大阪、京都、そして最近では広島や山口まで続くエリアに人が集中しています。地方も頑張っていますが、その中でも金沢はよく知られる存在です。ただ、金沢を越えて能登や加賀となると、どうしても認知度は下がります。理由はシンプルで、能登や加賀に行くには最低でも2泊が必要になるからです。長く滞在してもらえれば消費は増えますが、旅程に組み込みにくいのが難しいところではあります。

一方で、明るい材料もあります。今週、大阪のインバウンド向け旅行会社を訪ねましたが、とにかく活気がありました。外国人観光客を扱う旅行会社の勢いは本当にすごく、市場はどんどん広がっています。旅行のスタイルも少しずつ変わってきていて、観光地を回るだけでなく、「体験」を求める人も増えています。農業体験も、その一つとして可能性があるのではないのでしょうか。

特にアジア市場は、「安い・近い・短い」という条件がそろっていて、これからも日本に来る人は増えていくと思います。実際、台湾には日本に10回、20回、なかには何十回も来ている人もいます。そうしたリピーター向けの受け皿づくりは、とても重要です。

農家民宿について振り返ると、これまでは修学旅行の利用が多かった印象があります。また、杉原千畝さんに関係したイスラエルからのツアーもありました。イスラエルをはじめ海外から誘客するには、旅行会社の人を実際に現地に招いて見てもらう「ファムトリップ」が欠かせません。観光でも農業でも、派手なことより、こうした地道な取組を続けることが、結果につながっていくのだと思います。

## 【宮川委員長】

ありがとうございました。続きまして、瀧能委員お願いいたします。

## 【瀧能委員】

私からは、柱1の人材の確保・育成を中心に意見を述べさせていただきます。まず、外国人材など色々なルートからの人材確保ですが、実現するにはやはり他部署との連携がとても重要だと思います。例えば、能登は元々外国人の方にも人気で、移住されておられる方もいたと思うのですが、そこをもっとPRしたり、若い世代についても、自然豊かなところで子育てをしたいという方も増えてきていますし、先ほど数馬委員もおっしゃっていましたが、居住環境を整えることによって、人が集まってくるのではないかと思います。指導者についても、経験の浅い指導者の方もたくさんいらっしゃると思いますが、指導者には技術だけではなくて、コミュニティがとても重要になってくると思います。全体に言えることですが、コミュニティ力をいかに保てるか、広げられるかということ、人と人との絆が深まって、「同士」というものが生まれて、お互いに学び合うような強い絆がとても大切だと思いますので、そういうコミュニ



ティカを深めていけたら、農村の維持力も高まると思うので、先ほど知事も「能登の復興と挑戦」とおっしゃっていましたが、こちらに予算も投入して強めていただければ良いと思います。

### 【宮川委員長】

ありがとうございました。平委員お願いします。

### 【平委員】

私からは柱1と柱4について述べさせていただきます。先に他の委員の皆さんも触れられていましたが、柱1のところに出てきたタイミーやデイワーク等での人材確保について、私は去年、実際に県の方に勧められてタイミーに登録してみました。運用まで至りませんでした。やはり農業者にとって忙しい時に、「今欲しい人材」を単発で入れるのはなかなか難しいことで、その1人1人と面談をしたり、やり取りをしたりというところにコストがかかり、運用まで行くのは難しいと感じました。

また、先ほど河二さんがおっしゃっていた、「産地間労働力リレー」というのがすごく良いなと思ったのですが、うちでも、ブルーベリー、栗、しいたけで、時期がずれるものによって人材のシェアをしています。うちでは、元々地震前から、加工場の中にスタッフが泊まれるような場所を設けていて、そこを農業の再取得の制度を使って再建しようとしています。うちのブルーベリーのためにそこに年中ずっと人が泊まっているわけではないので、使っていない時期に同じ人材が別の農産物のところに行くのに使ったり、別の人が入れ替わりで使えたりするような場所になってもいいのかなと思います。何かそれを地域間でシェアできるような仕組みを皆さんとお話できたらいいなと思いました。

また、今能登では関係人口として、学生や二拠点生活をしたい人がすごく増えており、その中で農業に少し興味があるという人もいます。私たちも「いしかわ耕稼塾」を使わせてもらっていい仕組みでありがたかったですが、能登からいざ通おうとすると、学生たちはなかなか遠くて通えません。多分今は、河北潟に週1回通うという仕組みになっていると思うのですが、毎週土曜日に能登から通うということが難しく諦めてしまう、という人が去年私の周りに2人ほどいたので、できたらもっと通いやすく、参加しやすくなるような仕組みを作ってもらえたら嬉しいなと思います。

柱4で「能登の創造的復興」、「復旧・復興の加速化に向けた総動員」という言葉が入っているのがすごくありがたいなと思ったのですが、先ほど井村さんがおっしゃったように能登は復旧のフェーズがまだまだ続きます。私達も農地の集約や拡大となると、枯れた井戸はまだ使えないままだし、その復旧をどうしようかとかそういう水の問題もあります。これから復旧に向けて、注力していけたらいいなと思っています。

### 【宮川委員長】

ありがとうございました。一通り委員の方々からご意見をいただきましたが、私も委員として、一言言わせてください。

石川県の農業の全体の方向性をどっちに持っていくのかというときに、ブランドや品質とい

った、「付加価値の高いものを作って儲けていく」という話と、一方で石川みたいな米どころは国の食料安全保障に貢献するようにもっと生産性を上げて、「低い価格のものをたくさん作る」という話と、方向性が二つある中で、全体としてどちらを向いているのかというのがいまひとつよく分からないという気がしています。

食料安全保障的にしっかりと米を安価で提供していきましょうという方向でいくときに、一方で国もみどり戦略とかで環境保全やオーガニックというようなことを言うわけですが、今これだけ担い手が少なく大変、就農者をもっと確保しなければいけないという状況の中で、確実に労働力あるいはエフォートが大きくなるようなオーガニックや、無農薬という方向を盛り込むというのは何となく自己矛盾しているような気がします。どちらも必要なんだという方向性も当然あって良いと思うのですが、生産性を上げましようと言っている中で、一方で環境保全をして、そのために労力を必要とする農業もやらなければいけないと書かざるを得ないのは、行政としても辛いところかなと思いました。

さらには柱2の中に「消費者の理解促進」とありましたが、慣行農業とオーガニック・無農薬というのは、本当に科学的にそんなに差があるのか疑問に思います。オーガニックは何となく良いものだという前提でどんどん話が進んでいますが、慣行でやったときの環境負荷が、オーガニックだとどのくらい抑えられるのかというのが科学的にあまり議論されないまま、イメージ的に話がされているような気がします。オーガニックに付加価値をつけて、環境に優しい農業で作った生産物を支持したいという考えのもとに買い求められる消費者の方もおられるということは分かる一方で、付加価値が高い贅沢な農産物になっていくような気がしています。これを学校給食に取り入れて、「環境に優しい農業」というのを理解してもらうのも良いですが、あまり科学的な議論もないままに、どちらかというより良いよだという話をどんどん小学生や中学生に、無批判にというか考えずに推進していくのはいかがなものかなと個人的には思っています。さらには、特裁の程度をラベルをつけて段階で分けるというのも、科学的な意味がよくわからない中で、何となく化学農薬や化学肥料を使わない方が使うより良いという雰囲気だけ作って、人々を誘導していくようなところに行きつくのは何となく嫌だなという気がしていて、もう少し科学的な視点に立った農業の振興を進めるべきではないかというのが私の意見です。

### 【浅野副知事】

今ご指摘いただいた、特に環境の部分については、私も実は前から思い込みの強い議論になってしまっているのではないかと感じていましたし、環境負荷を低減する「環境に優しい農業」が別立てになっていることに違和感がありました。先生がおっしゃったみたいな、「オーガニックってどこまで本当に環境に優しいんですか」「どこにデータがあるんですか」みたいな話は、おっしゃる通り曖昧だと思います。

ただ今回そこにわざわざ「環境負荷低減」と書いたのは、例えば水田のメタンガスが温暖化を加速させているとか、化学肥料が硝酸態窒素になって水に流れて水質汚濁になるというのは、数字で表れている科学的な話ですし、環境に優しいとか体に良さそうみたいな話も含めて、そういうのが好きな消費者の方は、一定程度世界中にいらっしゃるわけで、そこが増えれば産業として伸びていくだろうと。要するに生産性の分子としての「付加価値」を向上させていく要素の一つとして「環境」というのがあり、生産性向上という意味では分母の「コスト」とをとにかく減らすという、この辺り両方を掛け合わせたような、環境だけ独立しない書き方と

いうのを思考しておりました。

また、最初におっしゃっていただいていたブランドを目指しているのかという話と、一方で米の超低コスト技術、節水型乾田直播や再生二期作などの話について、我々の思いは、基本的にかかるコストを下げたいだけであって、安い米を提供したいという思いは正直微塵もありません。常識的な価格は市場で決まるでしょう。しかしコストが高ければ何も始まらないわけで、結局は柱2の「農業所得の向上」です。つまり、農家さんの手元に残る所得がどれだけ増えるかが問題であって、コストが下がって価格が上がれば儲かるわけで、価格自体は高すぎるとか低すぎるといった社会の常識の相場感で決まるのだと思いますが、そもそも作る側が、コストを下げていく技術を磨いていかない限り、農家の所得がしっかり伸びていく素地は多分できないので、そのあたりは色々な方法を試みようとして、それが人手不足対策にも繋がるという期待を込めていますので、高付加価値化と低コスト化は、矛盾していないつもりです。伝わりにくいところはまた、より一層工夫をするべきと感じております。

### 【宮川委員長】

ありがとうございます。一通り意見をいただきましたが、この検討委員会に当初より陪席で北陸農政局から郡さんにご出席いただいております。ここで一言、国からの視点でご発言をお願いしたいと思います。

### 【郡オブザーバー】

石川県庁の皆様、それから委員の皆様におかれましては、地域農業の振興に尽力をしておられることに改めて敬意を表しますとともに、農政の推進にご協力を賜っておりますことに関しまして、改めて御礼を申したいと思っております。

これまでも議論があったように、気候変動や国際情勢の変化など様々な要因で食料安全保障上のリスクはかつてないほど高まっています。また先ほどもご指摘がありましたように、農業者の急減が現実のものとなってきている中で、急いで農業構造の立て直しを図っていかねばなりませんので、昨年策定された「食料・農業・農村基本計画」においては、最初の5年間を集中的に構造改革を推し進める期間として設定しています。サステナブルな農業構造を作るという意味では、地域計画の策定、ブラッシュアップを起点とした担い手への農地の集積・集約化、親元就農や雇用就農の促進による若い担い手の確保を図ることとしておりますし、このほかにも、予算面ではとりわけ、農地の大区画化、共同利用施設の再編・集約・合理化、スマート農業技術の早期実装、供給力を維持するための輸出拡大、の4点を重点的、加速度的に推進していくこととしております。これらの視点は、先ほどのビジョン案では、「地域計画」という言葉自体は直接的には見当たらなかったのですが、各項目の柱立てとして、概ね相応の記述が盛り込まれていました。先ほど岡嶋委員ほか各委員からご意見がありましたように、「どういう農業像にするのか」といった、人材の数や守るべき農地、生産規模など、県ならではの解像度のマクロ的な目標を持ちながら、このビジョンの策定を契機に、より一層関連の取組を進めていただけることを期待したいと思っております。

また、基本計画との関係で言えば、農林水産省では、減少していく担い手の方々を支えるため、各種作業や経営分析などを補完する農業支援サービス事業者の育成や、将来にわたって持続的な食料供給システムを作っていくため、原料調達、生産、加工、流通、小売、消費等の食

料システムの各段階の幅広い関係者との間での連携体制の構築、それから関係人口の多い、楽しい農村を作るため、地域の困りごとを、新しいアイデアや方法で解決する民間企業等の参画促進、いわゆる官民共創、といった多様な観点で、様々な民間主体の協働の喚起に取り組んでいます。ビジョン本文を起草する時にも、このように農業者、農業団体、農業関係者だけではない、幅広い民間主体にメッセージを発信していただくのが良いのではないかと思います。

能登に関しては、ご指摘のとおり、課題が他の地域より先に顕在化していますので、農地管理の仕組み作りや、担い手への農地の集積・集約を円滑に進めていくためにはどうしたらいいのか、また、新たな地域運営組織「RMO」をどう実現していけばいいのか、といった様々なことについて、この地域でこそ新しい工夫を取り入れていくことが重要だと思います。この点については、県の皆様や委員の皆様など関係者の皆様と意見を交わしながら国も一緒に進めていければと考えています。何卒よろしくお願いします。

### 【宮川委員長】

ありがとうございました。皆さんからいただいた意見についての補足や議論ができればと思いましたが時間が迫っております。

今回、素案の中で明確にメッセージとして出てきた「スマート農業」というキーワードについては、最近、県立大学でスマート農業の研究者を公募して採用しようとしたのですが、「スマート農業をやっている人」とは具体的にどういう人なのかイメージを共有するのが難しく、「スマート農業人材が大切」と一言で言うのは簡単ですが、スマート農業をリードしていける人というのは実際にいるのだろうかという議論になりました。

色々な柱がありますが、先ほどの用水の維持管理の問題や区画整理の問題など、ハード面にもすごくお金がかかる問題から、ソフト面の問題まで、色々あって、大きな予算が必要なので県レベルで実現するのは難しいという話と、少し工夫すればすぐにできるという話とが、もう少し整理されて、まとめられたら良いなという印象もあります。

今回、タイミーやデイワークといったキーワードを入れていただきましたが、実際に導入するのは難しく、全く分からない人に入ってもらうよりも、産地間でしっかりとしたネットワークを組んで、互いに協力し合う方が現実的なのではないかという意見もいただいたと感じています。集落が小さくまとまっても、これからは維持するのも大変だという意見も出たと思います。集落間のネットワーク作りも、多分ソフト面でやっていける話だと思いますので、これから具体的な施策を作っていく中で検討を深めていただきたいと思います。

「外国人」というキーワードについては、世間の今の風潮では「外国人をどんどん入れれば良いじゃないか」とは言いにくい雰囲気になってきている気がしています。外国人を入れるには、住環境を整えなければならない、日本語のサポート体制をしっかりと作っていかなければならないなど、このビジョンの素案には書き込める話ではないと思いますが、とても覚悟がいる話だと感じています。

浅野副知事何かご意見ありますか。

### 【浅野副知事】

ありがとうございます。委員長からも先ほど言及いただきましたが、タイミーなどの話は何

人かの委員の方からご意見いただきましたが、例えば平林さんからお話いただいたように、家畜防疫の話で、知らない人がいっぱい入ってきたら困るとするのは、常識として分かりますし、その他果樹についてもなかなか難しいだろうというのは分かるのですが、一方で、例えばお米などの世界では本当にいないのか正直疑問に思います。

タイミーなどの一企業の名前をビジョンの中で出していいのかというのは今後書き方を検討しますが、スポットワークというもの自体は本当に必要ないですか、大丈夫でしょうか。あまりコメントがなかったのですが、むしろお米農家さんや、その他のものを作っておられる方々がどう感じておられるか伺った上で考えた方が良くかと思いました。

### 【吉田委員】

お米の方は畜産等と違って、あまり人を問わない作業ではありますが、とはいえ農業は地域密着なので、全く地域で作業する経験がなければ、「あの圃場に行って作業してくれ」と言っても「あの圃場」が分からりません。一応うちでは、1日の作業の中で、工程や地図をトラクターに乗るオペレーターに渡して、「あなたは今日このエリアのこの部分の作業をしてください」と1人1人に説明するのですが、それでもその地域の全体像が分かっているのはじめてその地図を見て分かる話であって、本当に知らない人がスポットで来て分かるのかというのはなかなか難しいと思います。ただうちの場合は、遠方からではなくて、町内のリタイアされた方がほとんどなので、割とそういう面では効率が良いと感じています。でもそういううちみたいな地域ばかりではないので、他の地域では色々な課題はあるかと思っています。

また、先ほども申し上げましたが、作業だけではなくて企画や、商品を作る際の考え方などは、都会のクリエイター等のアイデアが参考になりますし、20日間みっちり働いてくれる人も必要ですけれども、隙間時間に1時間でも2時間でも働いてくれる、スポット的に人を雇えるような流れも今後必要と感じています。

### 【江藤農林水産部参事】

スポットワークについて、近年、特に能登の方では深刻な労働力不足になっていますが、以前地区別ワーキングをした際に、能登の大型法人の方から、ここ何年かはスポットワーク人材を活用してすごく助かったという話がありました。具体的には水稻農家では、育苗作業だったり苗箱運びだったり、素人が来てもすぐにできる仕事は、それなりにあります。その話を聞いたワーキングの他のメンバーも非常に興味を持って「ぜひこの情報を共有して欲しい、あるいはそういう仕組みがあるなら提案して欲しい、発信してほしい」という声をいただいたので、それを踏まえて、ここに記載をしています。

### 【浅野副知事】

ありがとうございます。

今日の議論や、委員長からの先ほどのお話も踏まえて進めていきたいと思っています。今回はまだ項目で並べていますが、実際に文章にしていく中で、流れの悪さなど、色々なものがきつと出てくるとしますので、しっかり議論をさせていただきたいと思っています。

人があって所得があって、という並びについても、もしかしたら所得があるから人が来るんだろうみたいな流れではないかとも正直思ったのですが、文章を書いていく中で理屈がこれだ

と通じないみたいな部分も出てきたら、並びを変えたり、整理を変えたりなど今後色々出てくるかと思います。皆さんとまた個別にも全体でも議論させていただきながら、表に出す文章を作っていきたいと思っています。

#### 【宮川委員長】

石川のビジョンではあるのですが、能登で違う KPI を作った方が良いのではないかというご意見もありました。

#### 【浅野副知事】

そこも引き取らせていただいて、検討、報告させていただきます。能登は条件が違う場所になってしまっていますから、別に分ける意味があれば分けることになると思います。「再掲」という感じで重複する部分もそれなりにあるのかなという気もしますが、そこをちゃんと検討することが大事だと思います。

#### 【宮川委員長】

柱4に書かれていることが全部できたら石川中が良くなるという感じもありますよね。では時間が来ましたので、今日の議事の進行を事務局にお返しいたします。

### 5. 閉会

#### 【福井農林水産部次長】

ありがとうございます。委員長、そして委員の皆様、円滑な委員会の進行にご協力いただきそして、貴重なご意見を賜りましたことを心から感謝申し上げます。今後の予定ですが、本日は皆様からいただいた貴重なご意見を十分に踏まえまして、最終案を取りまとめさせていただきます。5月頃に、第4回検討委員会を予定しております、そこで最終案をお示しさせていただければと思います。具体の日程につきましてはまた改めて事務局からご案内をさせていただきます。よろしくお願いいたします。

以上をもちまして第3回検討委員会を終了させていただきます。ありがとうございました。

以上